

ダーウインの生物進化論は、単に生物学の世界に波紋を投げかけただけに留まらず、以降の知的状況全般にも様々な形で影響を及ぼした。とりわけ、「優勝劣敗・自然淘汰」原則によって人間社会の変動を理論的に説明する、社会ダーウインイズムとして、である。

日本におけるダーウインイズムの受容は、明治一〇年の東京大学におけるエドワード・モースの講義にその端緒を發し、生物進化論としてよりも、社会ダーウインイズムとしての受容に圧倒的な比重が占められていた<sup>1</sup>。ダーウインイズムが日本に受容された明治一〇年代は、西洋がヘゲモニーを握る国際社会においては「レイトカマー」とされる日本が、西洋に倣って近代国家の建設を急ぎ、国際社会における遅れを取り戻すことが課題とされた時期である。こうした時代状況からすれば、ダーウインイズムが単なる生物学の学説としてではなく、人間社会の進化・発展を説明する理論として、明治日本の思想界に重点的に受容されたことは、一種の時代的必然として理解できよう。社会ダーウインイズムをして「日本の思想界に与へたる影響の甚だ大なりしものあり<sup>2</sup>」とする山路愛三の述懐は、その思想的インパクトの強度を示すばかりでなく、明治一〇年代の日本の知識人が抱えていた課題と、その緊急性という、当時の思想状況をも言外に示しているといえる。

こうした時代状況を踏まえれば、明治日本における社会ダーウインイズムの思想的意義を考える場合、思想の爆発的な流行の背景となった、対外認識という既存コンテキストを無視することはできない。これら二つの思想が、同一のコンテキスト内で連関したものである以上、互いを独立した存在として一方のみの捕捉に固執しては、常に他方を取り逃すという、重大な損失を招かざるをえない。そうした基礎的な前提を無視した分析では、思想の全容を理解することは困難である<sup>3</sup>。

思想の意義を理解する上で重要なのは、思想と思想とが連関する地点となる既存コンテキストを踏まえながら、思想連関によって生成する新たなコンテキストを分析の俎上に載せることである。その意味においては、鶴浦裕氏の研究は、社会ダーウインイズム研究史上の一つの画期として評価できる。鶴浦氏は「レイトカマー」日本という、広範な時代状況に着目した上で、日本における社会ダーウインイズムの受容・形成過程を、加藤弘之の言説に着目して、近代国家形成期における国民統合理論を模索したものと位置づけている<sup>4</sup>。しかし、課題は今なお残されている。鶴浦氏の分析は既存コンテキストである対外認識を、社会ダーウインイズムの発生地地点としてのみ捉えることで、生成コンテキストの全容を把握

するには至っていない。こうした、連関した思想の一方のみを捕捉することによって、他方を掴み損ねるという傾向は、明治日本の対外認識を分析した先行研究についても、概ね該当する。特定個人や特定の出版言説、あるいは特定グループの言説分析にその視座を置いた個別具体的研究<sup>5)</sup>と、同時代の広範な言説分析を志向した網羅的研究<sup>6)</sup>とに研究動向は大別できるが、これらの研究の視座は主に、西洋中心の国際社会観・文明史観と、その枠組み内でのアジア観、というように、対外認識そのもののみ限定され、同時代の諸言説との連関といった視座は、完全に欠落していることを指摘せねばならない。

社会ダーウィニズムと対外認識、それぞれをめぐる研究状況が、こうした限定的な視座を克服しない以上、明治日本の言説空間と、そこから敷衍される権力関係の総体的把握については、有益な成果は望むべくもない。こうした研究状況を踏まえれば、小林啓治氏が提起した社会ダーウィニズムと対外認識との思想的連関という視座は、実に示唆的なものである<sup>7)</sup>。とはいえ、小林氏の提起は、具体的な分析を経ておらず、更なる議論の深化が求められなければならない。

ここまで述べた先行研究に対する指摘からすれば、本稿の視座は、社会ダーウィニズムの政治思想史・科学思想史的分析という枠組みのみに限定されるものであってはならないし、同時に、対外認識のみを分析対象とするものであってもならない。本稿の視座は、あくまでそれらの連関性を問題にし、次のことを志向する。明治日本において社会ダーウィニズムが受容・形成される背景となった対外認識を、既存コンテキストとして前景化させ、その上で展開する思想の双方向的な連関性を明らかにすること、思想連関によって構成される言説空間と、そこから敷衍される権力関係の総体を明らかにすること、である。

これら二つの課題に応答するにあたって、本稿はその分析対象時期を、明治一〇年代を中心と定める。その第一の理由は、冒頭で述べたように、明治一〇年代を契機に社会ダーウィニズムが思想界の一大潮流を形成したということであるが、それにもまして重要な第二の理由は、福沢諭吉の「脱亜論」<sup>8)</sup>と樽井籐吉の『大東合邦論』<sup>9)</sup>という、当該期の対外認識のメルクマールの存在である。この二つの言説は、ともに明治一八年に立論されたまさに同時代のコンテキストから生成した言説だが<sup>10)</sup>、両者はそれぞれ、国際社会、とりわけアジアにおける日本の指針を、「脱亜」と「興亜」として、対称的に提示している。本稿が、この二つの言説をメルクマールとして取り上げるのは、社会ダーウィニズムと対外認識とによって双方向的に構成された言説空間が、どのような認識枠組みを構成し、明治日本の固有性をいかに規定したかを明らかにするからである。それはすなわち、明治一

○年代の日本における認識地図を新たに描き出すことを意味すると同時に、以降次第に帝國主義へと滑落していく明治日本の、最も基礎的な認識地図を照射するものともなる。とはいえ、ここで議論を急ぐことは避けねばならない。以下順を追って、分析作業を進めていくとしよう。

## 第一章 加藤弘之における社会ダーウィニズムの受容と形成

第一章から第二章にかけては、日本における社会ダーウィニズムの受容と形成過程の分析を行う。まず分析の俎上に載せるのは、加藤弘之の社会ダーウィニズムである。

加藤が社会ダーウィニズムに依拠して立論した『人権新説』の発表が、激しい論争が引き起こし、言説空間における社会ダーウィニズムの顕在化の重要な契機であったことはよく知られている<sup>11</sup>。その意味においては、加藤が言説空間において掌握していたヘゲモニーは、決して過小評価するわけにはいかないし、加藤の社会ダーウィニズムの性格を理解することは、様々な言説の配置図を理解する上での、最も基礎的な作業ともなる。

さて、従来加藤の社会ダーウィニズムは、天賦人権説否定による自由民権運動への批判を意図した『人権新説』中心に、その思想的意義が理解されている<sup>12</sup>。しかし、社会ダーウィニズムが受容されるにあたっての重要な既存コンテクストとして、対外認識という問題があることを考えれば、加藤の社会ダーウィニズムが、ただ自由民権運動批判のみにその照準を合わせていたとは、少々考えにくい。加藤の社会ダーウィニズムに隠された思想的核心を明らかにするためには、思想の受容と形成過程にまで遡及して、加藤の根源的な志向を探らねばなるまい。

そこで、本章が分析の俎上に載せる具体的な素材は、『疑動備志』と『日本之開化』である。『疑堂備志』は、一八七七年一月三〇日から一八八二年一月にいたるまでの加藤の詳細な読書記録であり<sup>13</sup>、この時期に加藤がいかなる問題関心に基づいて、どのような言説に接近していたかを示す好個の史料である。これは、同時期に用意された草稿『日本之開化』執筆のための、準備資料といった性格を有しているため、両者を一対のものとして読解していくことにする<sup>14</sup>。

### 第一節 『疑堂備志』にみる社会ダーウィニズム受容過程

それでは早速、分析作業に入ろう。本節ではまず、『疑堂備志』を中心に、加藤の社会

ダーウイニズムの受容過程を分析するが、『疑堂備志』がどのような形式によるものなのか、端的に示すために、一つ引用してみよう。

○同書【バックル『開化小史』・筆者註】第一卷百四十三葉 亜細亜ノ精神ハ特ニ神道上ニ現ス故ヲ以テ遂ニ君主壇制ヲ生シ又歐羅巴ノ精神ハ特ニ心理上ニ現ス故ヲ以テ遂ニ研究探討ノ心ヲ生シ自由自制ノ意ヲ生ス云々<sup>15</sup>。

このように加藤は、ただ単にバックルの『開化小史』を読んだという記録を残すだけでなく、どのような点に着目したかということまでも、詳細に記録している。「亜細亜ノ精神」と「欧羅巴ノ精神」という言葉が端的に示すように、加藤はここで、西洋と東洋との差異に注目している。それでは、なぜ加藤は両者の差異に注目するのであろうか。

○愚按 地中海沿岸ノ国々カ太古ヨリ互ニ外国貿易ヲ為スニ至リシハ波浪静穩ナル小海ヲ航スルノ便ナルニ由ル者ニシテ欧州各国ノ開化ハ蓋シ此好地形ニ根拠スル者多シ我邦ノ中古隋唐ニ往来スルノ不便ナルカ如キニハアラサリシナリ<sup>16</sup>。

○我邦ノ開化ヲ妨ケタル者ハ氣候・土地ノ豊富ナルコト、一男数妻等ヲ以テ尤ナル者トスル歟可考<sup>17</sup>。

ここからまずは、加藤が読書を進めていくにあたっての、基本的な動機が読み取れよう。すなわち、「我邦ノ開化」という言葉が端的に示すように、加藤の問題関心は、あくまで日本の文明化という点にある。また、それを「妨ケタル者」とあることからわかるように、日本の文明は西洋に立ち遅れているという現状認識に立脚しており、その要因として氣候を始めとする自然環境的要因や、家族制度といった文化的要因について考えるべき、としている。

つまり、『疑堂備志』のような読書記録を残すにあたっての加藤の動機は、西洋列強諸国と日本との「文明差」がいかなる要因に基づくものなのかを明らかにする、ということにあった。加藤のこのような志向は、『疑堂備志』を纏め上げる形で書かれた『日本之開化』において、より強く顕在化している。

日本人ノ招来ノ開否進退ハ如何ノ形況ナルヘキヤ是等ノ問題ハ此書ニ於テ必緊トスル所ナレハ左ニ(抹消)論説セント欲ス<sup>18</sup>。

ここで加藤は、将来日本人が文明化しうるか、という問題意識を前面に押し出している。こうした議論が、あくまで西洋との対比という形式を伴っている以上、日本が西洋的な高次の文明を獲得するための理論的根拠を提示する、というのが加藤の思想的核心であったと理解できる。こうした動機に基づき、加藤は様々な言説への接近を試みていく。

その端緒は、先述したように、自然環境的要因に着目することに始まるが、そこから加藤がひとまず仮説的に、自然環境的要因の重要性について着目していることが理解できる。しかし、こうした思考には、ある種のアポリアが付随せざるをえない。なぜならば、自然環境的要因とは、人間にとって変更しえないものであり、このある意味先天的な要因を文明化の要因として措定した場合、日本が先天的に劣位にあることを、加藤自らが立証してしまうという事態に陥るからである。こうした思考様式を採用する限り、日本の文明化という、加藤にとっての喫緊の課題をクリアするにあたっては、そもそも改善が不可能であるといった、致命的なアポリアを内包することになりかねない。加藤が出発点とする「日本レイトカマー」との認識が、西洋の先進性に裏づけられている以上、克服手段として西洋の言説に依存する以上、このようなアポリアはしばしば現出せざるをえない。

しかし加藤は、こうした論理構造上のアポリアを止揚するにあたり、あくまで西洋の言説を参照項とすることをやめない。加藤が次に接近を図ったのが、人種論であった。

○「(頭註・朱)人種」ヘルワルド氏ノ説ニ人智ノ開明ハ専ラ人種ニ由ル者ニシテ彼孟<sup>(マイ)</sup>孟士咎或

ハボックル氏等ノ説ノ如ク氣候地性等ニヨルモノニ非ス尤モ是等ノ者ニモ全ク関セサルニハ非サレトモ此事ハ甚タ僅ニシテ多クハ人種ノ優劣ニヨルト云ヘリ此事ヘルワルド氏開化史卷一六十丁ニアリ<sup>1)</sup>。

ここで加藤は、開化をもたらす要因として、人種という鍵概念を入手し、以降人種論への接近を図っていく。しかし、この時期に加藤が接近した人種論の中には、生後の環境によって後天的に人種が形成される、という言説と、先天的・遺伝的要因によって人種が形成される、とする言説とが含まれていた<sup>2)</sup>。後者は、いうまでもなく、加藤にとっては採用不可能な議論である。その一方、前者についても、生後の環境という、人間にとって変更可能な自然条件をも含めている限り、加藤にとっては安易な採用は控えねばならない。このように、人種という鍵概念を獲得しつつも、またしてもアポリアに苛まれた加藤は、これまでの読書記録を総括して、次のように記している。

バックル氏其他諸大家人民ノ開化ハ氣候土地ノ性食物地形其外ノ事ニ由テ淺深遅延ヲ生スト云フ固ヨリ是ナレトモ余カ見ヲ以テスレハ此事ヲ論スル前ニハ先ツ諸人種ノ体軀膚色等モ唯土地氣象等ニ由テ差異生シタルモノヤ將否ラスシテ他ノ原因ニヨルモノナリヤヲ究メサル可ラズ何者近世ノ心理学ニテハ心身ハ別物ニ非サルモノナルコト分明ナリタレハ若シ諸人種ノ体格膚色ノ土地氣象等ニ関涉スルナクシテ他ノ原因ニヨリテ差異ヲ生シタルモノナレハ其心神ニ於テモ亦原因ヲ同ウスルコト必然ナレハナリ故

ニ先ツ人種ノ事ヲ究メサル可ラズ<sup>21</sup>

かくして加藤は、自然環境が開化の要因であると認め、これまでの思索に一つの結論を与えつつも、「余カ見ヲ以テスレハ」として独自の転回を企てる。ここで加藤は、「心身ハ別物ニ非サルモノ」という「心理学」の見解を援用しつつ、人種間の肉体的差異が自然環境に因って生じるものならば、その精神的差異もまた同じ要因の帰結として考えられるのではないか、としている。

この転回は、加藤の社会ダーウィニズム受容過程における、一つの決定的な思索的転機であったと考えられる。人種という鍵概念をもたらした契機となったヘルワルドの議論は、これ以降完全に捨象され、人種間の精神的差異と文明化の関連の検討へと、その思索の力をシフトしているからである<sup>22</sup>。しかし、人種間の精神的差異を問題にするにせよ、それを形成する要因としての自然環境がある限り、アポリアは付随する。この点を宙づりにしたまま加藤は次なる参照項を、ダーウィンに定める。

○「種人」<sup>(頭註・先)</sup> 野蛮人種ト開明人種トハ必ス脳蓋大小ノ差アリ【中略】而シテ其大サノ

増シタルハ必ス Stirntheil von Schädel <sup>(欄外)</sup>ヒタイ 額 ノ処ナリ」ニアリ此処ハ即才智ノ所在ナリ<sup>23</sup>。

このように、人種間の精神的差異を形成する要因を、「脳蓋」の「大小の差」という、肉体的差異に着目した加藤は、肉体的差異によってもたらされる精神的差異、および、精神的差異によってもたらされる文明差、という理解の図式を獲得するに至る。

そうした理解のもとに、具体的な人種間の優劣に関して、次のような言説を参照する。

○方今人類ハ惣計ハ 1300 ト 1400Millionen ノ間ナリ而シテ 1350Millionen ヲ中数トス【中略】而シテ十二人種ノ最上ノ二種ナル Mongolen 及ヒ Mittelländer ノ人口頗ル多クシテ其他ノ人種ノ人口ハ甚少シ【中略】彼ノ生存競争ニ於テ強種ハ勝チ弱種ハ負ク而シテ右最上二種中ミッテルレンダーハ増シ又其中ニテモイन्दルマーネンハ更ニ増ス下等ハ漸々減ス云々其他ノコト同書六百七十八丁【ヘッケル『自然創造史』・

筆者註】ニアリ<sup>24</sup>

ここで加藤が、モンゴル人種が優良人種の一角を占める存在である、という言説に着目していることは、実に興味深い。これまでみてきたように加藤は、西洋の言説に依存することで付きまとうアポリアに苛まれてきたわけだが、「Mongolen 及ヒ Mitte-länder (モングロイドと西洋人)」が「最上ノ二種」として挙げられることで、ここでは西洋の言説そのものが、加藤の背中を後押しする格好になっている。しかし、加藤には残念だが、こ

ここで一つ確認しておかねばならないことがある。「最上二種中ミッテルレンジルハ増シ又其中ニテモインドゲルマーネンハ更ニ増ス下等ハ漸々減ス」とあることから、あくまで西洋人が最上位人種であり、それ以外の人種は被陶太人種であることも暗示されている以上、加藤にとつては、またしても困難が待ち受けていた、というわけだ。

このように、加藤は「レイトカマー」日本が進化するための理論的根拠を求めてきたわけだが、西洋の言説を直輸入する以上、その思索の行く手には終始アポリアが付きまとい、「死路」へと誘引され続けてきた。加藤は『日本之開化』において、ここまでの思索的困難を弁証し、一転して「生路」への跳躍を試みる。

## 第二節 『日本之開化』における社会ダーウィニズム形成過程

前節においてみた『疑堂備志』は、加藤の社会ダーウィニズムの受容過程を示す物であり、そこで加藤が行った作業は、いわば、諸言説の収集作業といえる。その成果を、一つの体系的理論に纏め上げることが目的とされた『日本之開化』は、収集を受けての取捨選択によって、加藤独自の言説の構築が志向されている。加藤が、日本の文明化のための理論的根拠として提示しようとした『日本之開化』は、どのような社会ダーウィニズムを展開するのか。そうした加藤の志向に基づいて紡ぎ出されるコンテキストの内にあつて、前節で分析対象とした言説が、いかなるニュアンスを身に纏うのかを、本節では検討する。

まず加藤は冒頭で、人類を「猿類ノ一種ヨリ進化シ」た存在として規定し<sup>26</sup>、その進化法則を次のように述べる。

數種ノ源因ヨリ生存競争ノ起ルニ至リ<sup>(採消)</sup> 能ク此競<sup>(テ)</sup> (諸般ノ況) 争ニ於テ捷ヲ獲ル  
ニ堪ユルモノハ<sup>(採消)</sup> (独リ諸) 遂ニ能ク<sup>(採消)</sup> (其志ヲ達) 他ノモノヲ倒シテ独リ能ク生存  
<sup>(採消)</sup> (ヲ) スル<sup>26</sup>。

加藤はこうして、生物界の基本法則としての「優勝劣敗・自然陶太」原則に基づき、そこに人間をも包摂するかたちで、人種間闘争論としての社会ダーウィニズムを展開するのだが、その主役たる人種区分については、以下を結論として提示する。

### ○第七蒙古人種 (Homo Mongolicus)

【中略】此人種中<sup>(採消)</sup> (大) 開明ノ度ニ於テ大ニ優劣ノ差アリ【中略】其優等ニ居ル者ハ既ニ上古ヨリ開明ニ向テ知徳大ニ上進セルモノアリ、即日本支那ノ如キ是レナリ。欧州諸学士ノ説<sup>(採消)</sup> (説) (論スル所ニヨレハ)<sup>(採消)</sup> 日本支那ノ如キハ決シテ迥ニ地中海人種ニ劣ルモノニ非サルヘシト云フ。【中略】





と考えられる。モンゴロイドの脳髓が西洋人種より小さいということが実証されるということは、ひいては、モンゴロイドが被陶太種であること実証される、ということの意味し、加藤にとつては死活問題なのである。

次に加藤は、人種間の差異形成について、次のように弁証を試みる。

古来最モ信用ヲ得タルハ氣候ノ差異ニ由テ皮膚<sup>(抹消)</sup>(色)毛髪ノ色及ヒ<sup>(抹消)</sup>(等其他)体格體質等ノ差ヲ生シ以テ人種ノ異同ヲ示シタルモノナリト云フノ説ナレトモ此説モ種々ノ故障アリテ<sup>(抹消)</sup>(理由アリテ)全ク信用シカタキモノトナレリ【中略】人種<sup>(抹消)</sup>(分裂)ノ相分レタル原因ニ就テ種々ノ説アリテ枚挙ス可ラスト雖モ一モ全ク、確信スルニ足ルヘキモノアラス<sup>29</sup>。

ここで加藤は、各人種間の差異を形成する要因として「氣候ノ差」(自然環境)を重視する言説を、「種々ノ故障」があるという強い表現によって、一つも確信を得られるものがない、として退けている。

こうして加藤は、人種間の差異形成の要因については宙づりにしつつ、それぞれに優劣差があること、そしてその優劣差が何によってもたらされているのか、ひいては、日本人種は優等人種たり得るかという問題に目を向けて、こう述べる。

大陸ニシテ深く内地ニ入ラス又縦合ヒ島国ナルモ他ノ国土ト甚ダ遠隔セサル位置ニア  
ル国土ノミ独り開化ニ向フノ理ヲ得テ之ニ反スルモノハ実ニ開化ノ為メニ不利ヲ受ク  
ルナリ【中略】是ニ由テ考フレハ日本ノ地勢ハ勿論其位置トイヘトモ多少<sup>(抹消)</sup>(共ニ)  
<sup>(抹消)</sup>(モ亦先ツ)我古来ノ開化ニ利益ヲ与ヘ<sup>(抹消)</sup>(アリ)シモノト認めサル可ラス<sup>30</sup>。

ここで加藤は、驚くべき転回を図っている。自然環境という要因を文明化に結びつけることは、ア・プリアリな決定論として、レイトカマーとしての日本に致命的なアポリアをもたらず危険性があることはこれまでの分析が明らかにしたとおりである。にもかかわらず、ここで加藤は、日本を取りまく自然環境を文明化するに有利なものとして規定するという離れ業をやつてのけるのである。

さて、以上のように加藤における社会ダーウィニズムの受容・形成過程について分析してきたが、それを言説空間の中で定位し、その思想的意義を精確に理解するために、福沢諭吉の『文明論之概略』と、政府関係者の対外認識との対比を行つておこう。

加藤は進化概念を用いて「今日ノ優劣等人種ハ遂ニ互ニ地ヲ換フルニ至ルヘキヤ今日ノ劣等人種ハ漸々進歩シテ遂ニ今日ノ歐洲開明ノ地位ニ進ムヘキヤ今日<sup>(抹消)</sup>(ノ)開明人種ナル歐洲人種ハ遂ニ漸々衰頽シテ更ニ野蛮ニ陥ルヘキヤ<sup>31</sup>」と問題提起的に述べ、日本人が

進化・文明化しうる理論的根拠を提示するのだが、その姿勢は福沢が「即ち野蛮は半開に進み、半開は文明に進み、其文明も今正に進歩の時なり<sup>32</sup>」として、西洋文明の受容を唱えつつも、同時に西洋文明を相対化した姿勢と、軌を一つにしている<sup>33</sup>。このように、加藤の社会ダーウィニズムの思想的核は、既存の西洋中心のヒエラルキーに日本が対抗するための、理論的根拠を提示するところにある。

しかし一方で、加藤が「概シテ、<sup>(抹消)</sup>半開以上ノ人民ニシテ殊ニ皆独立ノ権ヲ有シ外貌上ニ於テハ欧米各国ト全ク対等ノ交際ヲナスト雖モ……彼レノ圧倒ヲ受ケ輕侮ヲ被リ漸々精神競争場ニ於テ全捷ヲ彼ニ占メラレントスルカ如シ而シテ将来ノ形勢遂ニ如何ナル点ニ達スヘキヤ到底独立権ヲ維持スルコト能ハスシテ<sup>(抹消)</sup>藩属ニ帰シテ奴隷視セラル、ニ至ルヘキヤ<sup>34</sup>」と、国際社会を人種間闘争のコロッセウムとして観念するとき、それは岩倉具視の「海外万国ハ皆我ガ皇国ノ公的ナリ<sup>35</sup>。」という対外認識や、木戸孝允の「人之国ヲ奪ヒ候之道具<sup>36</sup>。」という万国公法理解と、認識枠組みを共有している。加藤の社会ダーウィニズムは「優勝劣敗・自然淘汰」原則を持ち出すことにより、結果的に「弱肉強食的世界観」を一層強化し、日本を取りまく「外圧」を過剰に発生させるイデオロギー装置としても機能するのである。

実はこのような加藤の社会ダーウィニズムは、日本にとって必要とされるイデオロギーとしては、重大なアポリアを孕んでいる。加藤の社会ダーウィニズム特有の論理構造上の問題を明るみに出すためにも、そして、言説空間というステージの全体像を照射するためにも、次章では加藤以外の社会ダーウィニストにもご登場願うとしよう。

## 第二章 「日本版」社会ダーウィニズムの二潮流

### 第一節 『人権新説』と人種改造論争

加藤の社会ダーウィニズムの重大なアポリアは、『人権新説』以降に展開された議論の中に、次第に顕在化していく。まずは『人権新説』についてみてみよう。加藤は「進化主義ヲ以テ天賦人權主義ヲ駁撃セン」と宣言し、次のように主張する。

吾人々類斯ク遺伝ト変化トニ由テ体質心性ニ優劣ノ等差生スルコト果シテ疑フヘカラ  
ストスレハ、其間ニ生存競争ノ生スルハ萬物法ノ定規ニ於テ実ニ已ムヘカラサルコト  
ト云フヘク、而テ此競争ニ於テ優者カ常ニ捷ヲ獲テ劣者ヲ制スルノコト、即自然淘汰  
ノ作用生スルハ、是亦決シテ免ルヘカラサルコトニシテ、是即所謂優勝劣敗ナリ。之

ニ由テ之ヲ觀レハ、萬物法ノ一個ノ大定規タル優勝劣敗ノ作用ハ特ニ動植物世界ニ存スルノミナラス、吾人々類世界ニモ亦必然生スルモノナルヲ了知スヘシ。<sup>37</sup>

このように、加藤は「優勝劣敗・自然陶太」原則を人間社会にも敷衍し、人間社会における人権の発生について、こう説明する。

吾人々類ノ權利ナルモノハ素ト只管優勝劣敗ノミノ行ハルルヲ制シテ、社会及ヒ各個人ノ安全ヲ求ムルカ為メニ專制治者カ始メテ之レヲ設ケタルモノナルコトハ既ニ明瞭ナリ。【中略】專制治者ナル最大優者カ其專制ノ權力ヲ以テ人衆ヲ統一シテ之レカ權利ヲ設ケ、以テ各人ノ互ニ凌辱妨害スルヲ制スルヲ得タルハ、即大優勝劣敗ノ作用ヲ用ヒテ以テ小優勝劣敗ノ作用ヲ制スルヲ得タルモノニ外ナラサレハナリ。<sup>38</sup>

自然競争による徹底的な個体間闘争の果てに決定される「最大優者」が、「專制ノ權力ヲ以テ」劣者に「權利ヲ設ケ」る、というのが、加藤による天賦人権説否定の図式である。こうして、強者による弱者支配の正当化を企てる点に、『人権新説』最大の眼目があるのだが、その過程で致命的なアポリアが露出することになる。

そうした事態は、自由民権運動を次のように批判する箇所<sup>39</sup>に顕在化する。

吾人々類ノ精神上ノ優勝劣敗ハ各個ニ就テ觀察スレハ決シテ悉ク良正ノ性質ヲ有スルモノニ非サルノミナラス、或ハ大ニ邪惡ノモノアリテ為ニ人類世界ノ妨碍トナルモノモ甚タ少カラサルハ固ヨリ論ヲ俟タス。【中略】然レトモ今日欧米ノ各国内ニ行ハルル優勝劣敗ノ如キノ多クハ良正ナル性質ヲ具スルモノナルヘシト思ハルナリ。【中略】欧米学士カ他州各国ニ此ノ如キ種族ノ殆ト欠乏スルコトヲ以テ其未開ノ一近因トナセルハ理アリト云フヘシ。【中略】我邦ニ至リテハ未タ嘗テ欧米ノ上等平民ニ比スヘキ種族アリト云フ可ラサル【中略】是ヲ以テ是等ノ輩敢テ社会ノ權力ヲ占有スル能ハサルノミナラス、却テ動モスレハ彼少年客氣ノ輩急躁過激ノ徒ニ煽動セラレテ遂に俱ニ事ヲ誤ルニ至ラントス。<sup>39</sup>

こうして加藤は、優勝劣敗を「良正／悪性」に専断的に区分し、前者は社会に利益をもたらすとしながらも、自由民権派のいわば「下からの」民主化運動を後者に見立て、専ら社会を害するものとして退けている。その理由として「我邦ニ至リテハ未タ嘗テ欧米ノ上等平民ニ比スヘキ種族」がないことを挙げているが、それは同時に日本社会の「未開ノ一近因」としても観念される。このような理解に基づいたとき、『日本之開化』で志向した加藤の社会ダーウィニズムは、「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」へと大きくその性質を変える。なぜならば、こうした理解が対外認識のコンテクストに敷衍され、西洋の

先進性が前提されれば、「レイトカマー」日本の可能性は、論理的に閉ざされてしまうからである。加藤は、こうした問題を回避すべく「社会ノ優者タルヲ得ルモノハ蓋シ欧米人ト及ヒ亜細亞人民中ニテ日本支那等僅々ノ開明人種ニ止マ<sup>40</sup>。」る、との一句を挿入していると思われるが、日本人種の優等性の理論的根拠が曖昧なままである。

こうしたアポリアは「人種改造論争」を契機に、より一層顕在化される。その詳細をみるにあたってまず、加藤が主張した人種改造論の基本的な枠組みを整理しておこう。

人為淘汰ニヨリテ漸ク新種属ヲ得ルモ自然淘汰ノ為メニ新種属ノ漸ク生スルモ其理ハ毫モ異ナル所ナシ唯自然淘汰ニ於テハ彼生存競争ナル無心ノ原因ヨリ漸ク淘汰ヲ起スト雖モ人為淘汰ニ於テハ無心ノ競争ニ代フルニ有心ノ人工ヲ以テスルノ別アルト及ヒ無心ノモノハ遅ク有心ノモノハ早キトノ差ヒアルノミ<sup>41</sup>

加藤はこのように、自然界の「生存競争」を応用し、競争状態を人為的に発生させることで、より進化した種族を得ることが出来る、と考える。では、加藤にとつて、人為的に進化させねばならない種族とは、何なのか。

人ノ固有スル所ノ体質心性ハ必ス父母若クハ祖先ノ遺伝ニ係ワラザルモノハ一モアラザルヲ知ルベシ【中略】良種ト云フハ即良好完全ナル遺伝ヲ受ケ良好完全ナル養成ヲ得テ俱ニ之ヲ兼併セシモノヲ指シ劣者弱者ト云ヒ悪手ト云フハ即遺伝養成共ニ劣悪ナルモノヲ受ケタルヲ指スナリ故ニ人為淘汰ヲ施スニ於テハ宜ク此理ヲ詳悉シテ遺伝養成両ナガラ務メテ良好完全ナラシムルノ術ヲ求ムヘシ<sup>42</sup>

このように加藤は、人為的に進化させるべき種族を、人間に定める。これは生物学としてのダーウイニズムに基づいた極めて優生学的な社会ダーウイニズムであるが、この理論をめぐって高橋義雄との間で勃発した「人種改造論争」をみてみよう。

高橋は『日本人種改造論』という、まさにその目的意識がよく現れたタイトルの著書において、「優存劣滅ハ有機世界自然ノ趨向ニシテ人類トテモ独リ此理法外ニ立ツコト能ハス」として、次のように述べる。

日本人ガ従来羸弱ノ心身ヲ以テ西洋人ト周旋シテ世務繁劇苦樂百出ノ中ニ奔走シタラバ或ハ精弾キ力屈シテ益羸弱ニ陥ルコトナキ歟【中略】即チ以上ノ理由ニシテ今日ニ於テ特ニ人種改良ヲ唱フルノ主眼モ亦専ラ此辺ニ在テ存スト知ル可シ<sup>43</sup>

こうして高橋は積極的に、「人種改良」を日本人の競争・生存手段として前面に打ち出す。そして具体的な方策として、次のように主張する。

劣等人種ガ優等人種ト雑婚スルノ際ニハ劣等人種ニ取リテハ多少好結果ヲ来スコト決

シテ掩フ可ラズ【中略】我邦ノ人民ト西洋人種トヲ比較シテ彼レ大ニ我レニ優ル所モ  
アラバ最早小都合ヲ顧ミルニ暇アラズ一國ノ公ノ為メ一身ノ私ノ為メ能力遺伝ヲ目  
的トシテ颯々ト良縁ヲ求メ颯々ト雑婚スルモ敢テ不可ヲ見ザルカ如シ<sup>44</sup>

このように高橋は、西洋人種の優等性を前提とした上で、異人種間の「雑婚」によって日  
本人種の改造を図るべきと主張する。

興味深いのは、高橋の人種改造論に加えられた、加藤の批判である。加藤は「人種改良  
ノ辨」と題した論説において、こう主張する。

成程吾日本人種ノ西洋人種ニ劣レルコトハ殆ト誰モ怪マサル程ニ明瞭ナルコトナレハ  
其改良ヲ謀ラントスルコトニ就テハ敢テ異論ヲ唱フル者ハアラサルベシ【中略】優等  
人種ト劣等人種トノ雑婚ヲ企テ雑種ヲ造リテ従前ノ劣等人種ニ優レル人種トナサント  
スルハ論者ハ之ヲ人種ノ改良ト称スト雖モ其実決シテ人種ノ改良ニハアラスシテ全ク  
人種ノ変更ナリ西洋人種ノ血液ヲ日本人種ニ加フルトキノハ加フル丈ケハ日本人種ノ  
血液ヲ減スルモノナレハ漸々此術ヲ施シテ已ムコトナキトキハ遂ニ日本人種ノ血液ハ  
殆ト滅絶シテ畢竟殆ト西洋人種ノ血液ノミトナルハ甚タ明瞭ナルコトナレハ之ヲ人種  
ノ改良ト称スルハ不可ナラン<sup>45</sup>

ここで加藤は驚くべきことに、西洋人種の日本人に対する圧倒的優位性を認めてしまつて  
いるのである。さらに加藤は、日本人の純血性を護持すべきとのショーヴィニスティック  
な議論を展開した上で、「日本人種力到底西洋人種ト相拮抗スル能ハスシテ生存ノ為メノ  
競争ニ於テ全敗ヲ取ルニ至ラハ甘シテ全敗ヲ取ル<sup>46</sup>。」と、ロマン主義的な見解をもつて  
論を結んでいる。ここにおいて、加藤がそもそも社会ダーウィニズムを受容・形成した根  
源的動機は、完全に頓挫した。自由民権運動批判をすべく立論された『人権新説』は、加  
藤の社会ダーウィニズムを「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」へと傾斜させ、その  
後に展開された「人種改造論争」を経由して、日本人が被陶太種であるという図式が、完  
全に露呈するに至る<sup>47</sup>。ここにおいて加藤の社会ダーウィニズムは、「レイトカマー」  
日本を取りまく弱肉強食的世界のみを前景化し、過剰に「外圧」を発生させるイデオロギ  
ー装置に成り果ててしまったのである。

ここまでみてきたように、加藤の社会ダーウィニズムは、弱肉強食世界とされる国際社  
会において、日本がいかにして生存を模索するかという課題に応答しようとするものであ  
った。一見すると『人権新説』は、自由民権運動批判という国内政治的な問題にのみその  
矛先が向けられているかのようにもみえるが、加藤が「転向」してまで国家主義による中

中央集権化を志向した背景には、国際社会に迅速に対応するためには、強固な中央集権国家の建設が何よりも急がなければならないという考えがあったとすれば、その連続性は容易に理解できよう<sup>48</sup>。しかし「強者必勝・弱者必滅」という論理構造をもってして、国内政治的コンテクストと国際社会的コンテクストとに同時に対応するということは、致命的な不整合を招来せずにはいられなかったのである。

さらに加藤の社会ダーウィニズムは、国内政治的コンテクストのみに議論の射程を限定したとしても、依然としてアポリアを残している。なぜならば、「優勝劣敗・自然淘汰」原則に基づいただけの『人権新説』は、将来さらなる強者が現れたときには、現時点の強者⇨支配者が、弱者⇨被支配者へと転落する局面の存在を、原理的に排除できないからである<sup>49</sup>。こうして、国家主義による支配の正当性を論証するにあたっては、『人権新

説』はあまりにも論理が未熟なものであり、また、最強者による劣者の専制的支配という国家観では、国家の担い手として国民の主体性を期待することも、そもそもできない。

『人権新説』で展開された加藤の社会ダーウィニズムは、国民⇨国家形成のためのイデオロギー装置としては、当初から破綻していたのである。こうして加藤の社会ダーウィニズムは幾重にも破綻を抱え、再び「死路」へと迷い込んでしまったのである。

「レイトカマー」日本にとって必要とされる社会ダーウィニズムは「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」ではなく、「弱者進化的型ダーウィニズム」でなければならない<sup>50</sup>。しかも、その理論を「優勝劣敗・自然淘汰」原則によって構成すること、またそれによって、国民⇨国家形成のイデオロギー装置を構成すること、これらが課せられた条件であるとなれば、いかなる転回によって「日本版」社会ダーウィニズムは完成するのか。

## 第二節 有賀長雄の「社会学」

鴫浦氏によれば、日本人の後発性こそが国家間闘争においてはむしろ有利に働く、というような社会ダーウィニズムのパラダイムシフトは、丘浅次郎の登場を待たねばならないとされる<sup>51</sup>。しかし筆者のみるところ、それ以前に注目すべきは、明治一〇年代に有賀長雄が提示した「社会学」である。

有賀は「社会学」シリーズとして、『社会進化論』、『宗教進化論』、『族制進化論』を刊行しているが、スペンサー社会学に大幅に依拠しながらも、国家の進化について独自の議論を展開している<sup>52</sup>。有賀は、「君主専制の世」、「戦国擾乱の世」、「教権一統の世」、「革命擾乱の世」、「法律一統の世」といった段階を経て国家が進化し、現在の

日本が「議論擾乱の世」の段階にあるとした上で<sup>53</sup>、こう論じる。

蓋し社会の進化既に此程度に達したる上は最早擾乱に至る事無きや、將た亦是有りや、果して有れば、其は如何なる原因に依る如何なる變動ぞといふ事を定むるは、独り我が日本のみならず、全開明世界の急務たり、何となれば当時宇内の開明諸国は大抵みな法律一統の中途に在る者にして、若し向來の擾乱にして之を預知することを得べくむば、之か予防の備を為すの期は今日に在ればなり。【中略】大なる變動の種子尚ほ一つ残れるなり、曰く他無し、法律一統の世には社会の衆人各々みな自己の本身を以て社会中の主位に在る者とし、自己の思想を以て行為を制するの原理となすに至る事はなり。【中略】専制と教権との束縛は漸く脱したれども未だ自己の、思想の束縛を脱せず、凡そ世の中に自己の思想の上に立つ者無しと思ひて思想の指示するところは少しも疑わざる事是れ今日の開明社会の人の常状なり【中略】是れ日本、支那、西洋の人の現今の心情なり。<sup>54</sup>

有賀が、西洋と日本を同列の進化段階にあるとしている点も注目し値するが、より重要な点は、有賀が国内政治にどのような眼差しを向けているかであろう。「向來の擾乱」を予知し、予防に備える期は「今日に在」りとされ、議論が自由に行われることが「大なる變動の種子」とされていることから、自由民権運動の高揚期である現在の日本には、国内の調和を乱す因子が内包されている、と有賀は認識している。では、有賀にとって、国内の調和の乱れとは、どのように観念される事態なのか。

体制の諸要素互に相調和するときには国家の存立力強く不調和なるときは弱し是又国家盛衰の理の一なり。いかに要素の数多く、且つ各要素みな実効ありて虚空ならざるとても、其効用相軋し、甲の効用は乙の効用を減じ、乙は丙を害する等の事あるときは、何の益もなく却て隆盛に害あり、之に反して若し各要素に於て他の諸要素の効用を助くるの勢ありて、其間に軋轢なく調和あるときは、為に国家の隆盛を増す事、輕少ならざる事理の当然なり。<sup>55</sup>

このように有賀は、国家内部の調和は国家の隆盛を、不調和は衰退をもたらすと考えている。とすれば、自由民権運動の高揚を、国家内部の不調和として見なしている有賀は、自由民権運動に対しては批判的な立場を取っていると考えられる。その意味においては、加藤が『人権新説』によって「強者必勝・弱者必滅型ダーウイニズム」を主張した動機と、有賀「社会学」の動機は、軌を一にしている。しかし、有賀が導出した結論は、さらなる進化によって「道理一統の世」となり、国家の上下一統が完成する、という極めて樂觀

的なものであった<sup>56</sup>。加藤が主張したような、国家権力の絶対性を志向する社会ダーウイニズムとは、実に対照的な結論である。このように、有賀「社会学」の白眉の一つは、楽観的な発展論であるにせよ、「道理一統」というかたちで国民Ⅱ国家の有機的結合を可能にする枠組みを有していることにある。

さらに、有賀「社会学」の基礎原理についても確認しておこう。

社会の発達ハ一步として自然陶太の理に依らざる無き事明白なり。社会の発達にして果たして自然陶太の理に依るものなるからにハ、其止息するハ、共に存立を競争する所の社会近隣に無きかゆえ、自然陶太の理、其間に行はれず成りしに因る者なる事、道理に於て疑ふへからざる所なり【中略】社会の発達ハ果して存立の競争に因る者なるに相違なき上ハ、競争烈しければ従て発達も深く、競争軽ければ従て発達も浅かるへき道理なり。<sup>57</sup>

一見すると、「優勝劣敗・自然陶太」原則に基づいた典型的な社会ダーウイニズムであり、「強者必勝・弱者必滅型ダーウイニズム」へと傾斜する可能性のある議論であるが、注目すべきは、以下の箇所である。

一人つ、孤立して戦ふ者ハ負け、数人競合して戦ふ者ハ勝つ道理なりと。一人強き者ありても、弱き者十人の競合に勝つ事難かるへし。故に少しにしても他人と協合せむとするの性質を稟けたる者ハ敵人及び猛獸に負くる事少なく、却て獲物を得る事も多きを以て、生存競争の間に自然淘汰の理に依て勝て其生命を保存することを得る道理なり、且つ件の性質を其子孫に遺伝することをも得る道理なり。<sup>58</sup>

このように有賀は、生存競争を勝ち抜くための不可欠の要因として、共同体形成という因子を挿入する。そして、その共同体を強固にするために、「宗教」や「族制」などによる体制の強化が起きると説明されるのだが<sup>59</sup>、「弱者」も共同体を形成することで「強者」となって生存可能である、という点は最も重要である。ここで有賀は、「優勝劣敗・自然陶太」原則に基づいた社会ダーウイニズムに拠りながらも、そのアポリアを回避する「弱者進化した型ダーウイニズム」を提起する。それはいわば、西洋思想としての社会ダーウイニズムを弁証する「日本版」社会ダーウイニズムといつてよい。

そのように、有賀を「日本版」社会ダーウイニズムのイデオログとして位置づけて差し支えないことは、有賀の天皇制理解をみれば、さらに一目瞭然となろう。有賀は『族制進化論』においてこう述べる。

家長制度を備へたる社会ハ益々勝て榮え、其余はみな負けて亡ふるに相違無し、是れ



即ち家長に於て、其社会の督制長とも成る所以の者なり。今男系親族の長の督制者となりたる者を指して、族長と曰ふ。家族分派して連合家族となるに及ては、嫡流の家の長に於て酋長となり、連合家族又分派して村族と成るに及ても、同じ次第により嫡流の村族の村長に於て族長となり、村族又分派して氏族と成るに及ても、嫡流の氏族の大氏の氏長に於て族長となる次第は、一々細論するに及ばず、現に我が国の皇室の如きは、斯る順序を経て起りたる督制権の最も完全なる例とすべし。【中略】一朝一系にして異朝相続く事無く千古の昔より皇統の連綿たるハ日本社会の族制の完全にして外国はおるか支那も及ばざる証拠なり、之をしも尊ハすして何を乎尊ふべき。<sup>6</sup>

このようにして有賀は、族制進化の法則によつて、天皇家および日本人を、一つの男系家族から徐々に拡大・発展した万世一系の同一氏族と規定した。これにより、天皇が国民を支配する歴史的正当性が、まさに社会ダーウィニズムによつて、それも、共同体の有機的な形成と、弱者の進化を妨げることなく証明されるのである。つまり、有賀「社会学」は、国民Ⅱ国家形成を可能とするイデオロギー装置としての強度を有しつつ、「弱者」日本が必要とする「弱者進化型ダーウィニズム」の理論的枠組みを提示しているのである。加藤の「強者必勝・弱者必滅型」に傾斜した社会ダーウィニズムが帰結する国民Ⅱ国家形成の困難と、国際社会における「弱者の不可能性」は、こうして有賀「社会学」によつて弁証され、「日本版」社会ダーウィニズムは、この地点において出現するのである。

以上考察を進めてきたように、社会ダーウィニズムは対外認識という先行コンテキストの上で、広範な射程を持ったイデオロギー装置として、巨大な言説空間を構成していった。その途上で「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」へ極端に傾斜した加藤弘之は、国家の内外両極面において理論的に応答不能に陥ったが、有賀「社会学」は、加藤と同様のコンテキストから生成しつつも「弱者進化型ダーウィニズム」の提起に成功したのである。この地点において、言説空間における社会ダーウィニズムは二つの潮流に、すなわち「強者必勝・弱者必滅型」と、「弱者進化型」とに分岐したのである。とはいえ、ここで注意しておかなければならないことは、これらの思想のいずれもが「優勝劣敗・自然淘汰」原則に基づくものである以上、日本を取りまく「外圧」の存在を否応なく措置するということである。こうした、二つの社会ダーウィニズムの基本的な性質は、どのような対外認識を帰結するのであろうか。我々の知的探究は、いよいよ最終章を迎える。

### 第三章 社会ダーウィニズムと「脱亜／興亜」言説

## 第一節 「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」と「脱亜」言説

社会ダーウィニズムが帰結する対外認識という、新たなコンテクストを分析するにあたって、「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」と「弱者進化的型ダーウィニズム」とが、それぞれ「脱亜／興亜」言説にいかに関係するものであるかを、本章ではみていく。

まずは、前者の代表格ともいえる、加藤弘之の『人権新説』の周辺から、分析作業を開始しよう。

吾人々類世界ハ実ニ千種萬類ノ競争ヲ以テ羅織セル一大修羅場ト云フモ可ナルモノニシテ、此一大修羅場ニアリテハ必ス体質心性ニ於テ遺傳ト變化ノ優良ナル者力遂ニ捷ヲ獲テ、其劣悪ナル者ヲ倒シ以テ之ヲ制スル【中略】達賓氏ノ説ニ後世早晚優等ノ人種全ク捷ヲ占メテ独リ生存シ、他ノ劣等人種ハ遂ニ敗ヲ取リテ全ク断滅スルニ至ルコト必然ナリト云ヘリ。【中略】若シ幸ニシテ其断滅ヲ免ルルモ、更ニ彼心性上ノ競争ヨリ権力競争ヲ生スルカ故ニ、是等人種力到底欧米人民ノ制馳ノ下ニ屈セサルヲ得サルハ、決シテ疑フヘキニアラス<sup>61</sup>

加藤はこのようにして、国家間における「強者必勝・弱者必滅」論を主張するわけだが、ここで提示されている認識枠組みは、強者による弱者の淘汰を正当化する以上、対外膨張論に転化する契機を内蔵している。その潜在的暴力が顕在化するのには、福沢諭吉が「脱亜論」において次のように主張するときである。

我日本の國土は亞細亞の東邊に在りと雖ども、其國民の精神は既に亞細亞の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。然るに爰に不幸なるは近隣に國あり、一を支那と云い、一を朝鮮と云ふ。【中略】我輩を以て此二國を視れば今の文明東漸の風潮に際し、迥も其獨立を維持するの道ある可らず。【中略】左れば、今日の謀を為すに、我國は隣國の開明を待て共に亞細亞を興すの猶予ある可らず、寧ろその伍を脱して西洋の文明國と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣國なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分す可きのみ。<sup>62</sup>

自身が関与した甲申政變の失敗をうけて、福沢はここで、西洋人が接するように中国朝鮮を扱うべきとして、文明史觀に依拠した侵略主義的な主張をするに至る。そこに加藤が主張する「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」が接続されたとき、生物界全般を含めた万物の法則として、侵略主義的主張はその最大暴風圏を構成するのである。

こうした関係性は、加藤の『人権新説』を批判する言説にも該当してしまふ。一例とし

て、馬場辰猪による加藤批判をみてみよう。馬場は、万物に遍く存在する自然法則としての「優勝劣敗・自然陶太」原則を前提にしつつも、自然界とは異なる人間独特の法則として、次のように述べる。

既ニ変化シテ人間タルノ現象ヲ顯ハシタル以上ハ、必ス其目的ヲ達セント欲スル事他ノ動植物ニ異ナル事アルニ非サル事【中略】其目的ヲ達スルニ就テ運動スル所ノ方法ハ、常ニ障碍ノ最モ少キ地ニ向テ進行セン事ヲ求ムル者ナル事ハ已ニ明々白々ナルニ非スヤ。前段説ク所ノ理ハ独リ有形上ノ事物ニ止ラス、人類無形ノ精神上或ハ道德上ニ於テモ亦必ス此ノ如キモノナリ。茲ニ一個人ノ此世ニ出ルト仮定セヨ。其人ハ必ス自己ノ生存ヲ保持セント欲スルナラン。其生存ヲ保持セント欲セハ必ス之レカ幸福ヲ求ムルナラン。之レカ幸福ヲ求メント欲セハ、必ス其幸福ヲ求ムルニ就テ最モ障碍ノ少ナキ手段ニ頼ルヘシ。【中略】然リ而シテ其障碍最モ少ナキ道トハ何ソヤ、人民ノ自由平等則是ナリ。若シ夫レ人類ニ自由平等ナルモノナカリセハ、社会ノ生存幸福ヲ得ルノ際ニ於テ常ニ障碍ノ起ル事多カルヘシ。<sup>63</sup>

こうして馬場は、「其目的ヲ達セント欲スル」ことを、人間の生来の性質として考え、天賦人權論を徹底的に自然主義的ないしは自然科学主義的な方法で論証し、加藤を批判する。しかし馬場は「社会ノ愈リ大トナルニ從ヒ愈リ其親和力ヲ発シ或ハ治者ト被治者トノ區別ヲ生ジ或ハ邦国州郡ヲ奪掠スルガ如キノ勢ヲ保チ更ニ此ヨリ上進シテ卒ニ彼ノ文明昌盛ノ国トナルヲ得ル者トス<sup>64</sup>」と自身のマニフェストである「本論」で述べているように、自由競争による「優勝劣敗・自然陶太」原則は、高次の文明をもたらす因子として、積極的に評価するのである。

その意味においては、馬場の社会ダーウィニズムは、「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」と通底する性質を持っているが、そうした立場からはいかなるアジア観が導出されるのか。福沢と同じく、甲申政変後に立論された馬場の「東洋の氣運の説」の主張はこうである。

此の衰微せる亜細亞洲中に立ち奮ひて歐洲諸強国に対し充分なる競争を試み東洋の衰運を挽回す可き者は夫れ止だ我が日本帝国あるのみ、見よ我日本は自ら西洋諸強国の侵入を防禦せざるべからざるのみならず又他国を救援するの義務あり【中略】今日の急務は支那を利用する一方あるのみ、夫れ然り、我邦にして支那を利用せむとせば支那に向ひ如何なる手段を施す可きか、曰く我日本の進路を妨害せむとする彼の支那主義なる者を排撃し彼をして歐洲主義を取らしむるに在り【中略】抑も事物の改良は外

部より刺激して内部の之れに応ずるに在り【中略】其目的を達せむと欲せば武力を以て外面より之れが刺激を与へ以て其改良を促す可きなり。<sup>5</sup>

このようにして馬場は、中国への干渉政策による「欧洲主義」||「脱亜」を唱えるわけだが、その方策としては「武力を以て外面より之れが刺激を与へ以て其改良を促す」ことを主張する。福沢と馬場はニュアンスを異にするにせよ、侵略主義的志向を共に内包している。馬場が積極的に評価する「優勝劣敗・自然陶太」原則は、こうした侵略主義を駆動させるばかりで、停止させることなど望むべくもない。「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」と侵略主義的な「脱亜」言説の親和性は極めて高く、思想が結合するによつて生じるコンテキストは、対外侵略論の相補的な生産を帰結してしまうのである。ならば一方の「弱者進化型ダーウィニズム」については、どうであろうか。

## 第二節 「弱者進化型ダーウィニズム」と「興亜」言説

その問題を明らかにするために、次に、樽井籐吉の『大東合邦論』を基軸に分析を行おう。

【日本・筆者註】能く開明を致すといえども、国力これ【欧米列強】に称わざれば、即ちその弊は文弱に流れ、優勝劣敗・弱肉強食の天数を免れず。いずくんぞ万世の平安を保つを得んや。【中略】果たして然らば即ちまさに何を以てこれを救わんとするや。蓋し国人の特性に随い、同感の友国と相和して以てその力を合わすの一策あるのみ。【中略】故に余切にこれを朝鮮に望む、豈已むを得んや。朝鮮これを日本に望まざれば、即ちまた優勝劣敗の天数を免れず。<sup>6</sup>

このように樽井は、「優勝劣敗」原則にもとづく国際社会においては、日本と朝鮮は共に生存を図るためには「相和して以てその力を合わす」しか方策はないとして、両国の「合邦」を主張する。こうした共同体形成主義的な志向は、有賀「社会学」が提起した「弱者進化型ダーウィニズム」と同一の論理に基づいている、といえよう。

さらに、樽井は、共同体形成に不可欠な人間の特性を、次のように主張する。社会とは人々同気相求め、同類相依て以て協力分労有るの謂いなり。同気相求め、同類相依るは、自ら親和の性有りて然るなり。蓋し親和なるは、萬物通有の性にしてその本原天に於いて出ずるものなり。【中略】いわんや、人が動物の霊を為すに於いてをや。然うしてその親和する所以は、己を愛するに始まる。己を愛するが故に同気相求め、同気相求むるが故に同類相依る。同類相依り相助けてその希望を達するを得る。

故に親和は天賦の性なりと曰う。【中略】進化学者が社会変遷の理を説くに、之を生  
存競争、優勝劣敗、自然淘汰の作用に帰するなり。その説精なりといえども、なお未  
だ尽くさざる者あり。【中略】社会もまた親和の体、競争の用と相待ちて成るものな  
り。<sup>67</sup>

こうして樽井は、「競争の用」に「親和の性」というモメントを付け加えて、「進化学  
者」への批判を行い、アジアとの連帯を可能にする理論的基盤を提示する。こうした樽井  
の主張には、福沢の「脱亜論」へのアンチテーゼが含まれていると考えられるが<sup>68</sup>、社  
会ダーウィニズムへの徹底した批判として理解してよいのだろうか。共同体形成主義的な  
「弱者進化型ダーウィニズム」もまた、社会ダーウィニズムの一つの系譜であるする本稿  
の立場からすれば、答えは自ずと「否」である。

天賦人權論争において、加藤批判を行った諸言説にみられる「社会ダーウィニズム的思  
考」を例に挙げたとき、そのことはより一層明らかになる。加藤批判を行った論者は、む  
しろダーウィニズムを積極的に摂取することで加藤批判を展開しており<sup>69</sup>。そのことは、  
先にみた馬場にも明らかであるが、ここでは馬場とは対称的に、「弱者進化型ダーウィニ  
ズム」的な性格を有した言説に注目しよう。

如何ナル野蛮世界ノ人ト雖モ、他ノ襲撃ヲ受ルトキハ、之レヲ扞御スルノ意ナキ者ハ  
アラズ。文明世界ノ眼ヲ以テ之ヲ見ルモ亦之レヲ非トスル者ハアラズ。然ラバ則チ自  
家防護ノ権利ハ開野ノ別ナク、人間固有ノ権利ト云フベシ。其他此類ヲ推ストキハ人  
間ノ天賦ニ出ル者決シテ少ナシトセザルナリ。【中略】欧西ノ人ハ東洋ノ人ニ優レリ。  
故ニ欧西ノ勢力自ラ東洋ヲ制セントスルノ状アルハ、現ニ吾人ノ目撃スル所ナリ。

【中略】此自然ノ勢ヲ制シ、速力ニ同等ノ勢力ヲ占有セン事ヲカメザル可ラズ。是レ  
吾人ノ生命ヲ保全シ幸福ヲ追求スベキ最良手段ニシテ、人此性ヲ有セザルナク、又此  
欲ヲ抱カザルハナシ。<sup>70</sup>

これは、東京横浜毎日新聞に掲載された加藤批判であるが、ここでは、人間固有の「自家  
防護ノ権」が天賦人權であると位置づけられ、そのことによって、西洋に対する日本の防  
衛の正当性が、そして日本が「同等ノ勢力ヲ占有セン事ヲカメザル可ラズ」として、日本  
が強者となるべきことが主張されている。また、人間の特性は、以下のように論じられる。

予輩ハ以為ラク優勝劣敗ノ作用人間ニ行ハレザルニアラズト雖モ、唯ダ此一作用ヲ以  
テ人間ノ現象ヲ尽ス能ハズ。【中略】其然ル所以ノ者ハ何ゾヤ。人類ノ天質動植物ニ  
異ナル者アリテ常ニ優勝劣敗ノ作用ヲ緩和スベキ原素ヲ有スルヲ以テナリ。【中略】

人類ニハ同情相感ノ性アリテ動物ニハ唯ダ一己ノ憂喜アルノミ。人類ニハ共同相護ノ情アリテ動物ニハ是性ヲ欠ケリ。此等ノ性情ハ皆夫ノ單純無情ナル優勝劣敗ノ作用ヲ緩和スル所以ノ具ニアラザルハナシ。<sup>71</sup>

ここでは人間の特性として、「同情相感」と「共同相護」の性質が論じられているが、人間社会の二大駆動原理としての「優勝劣敗ノ作用」とそれを抑止する人間の特性、という図式は、樽井の主張する「競争の用」と「親和の性」と、同一の論理構造である。また、「共同相護」によって弱者「日本」の防衛を正当化し、日本が強者となることが主張されている点もまさしく、樽井の主張するところであり、「弱者進化型ダーウィニズム」に他ならない。これと同型の主張は、矢野文雄による「人権新説駁論」にも看取される。矢野は、自然界の「優勝劣敗・自然淘汰」原則を踏まえつつ、人間社会の二大駆動原理としての「生存抗争」とそれを抑止する人間固有の「道理」といった図式を提示する。その図式は、「侵凌ヲ防グノ権利」と「共利ヲ謀ルノ道理」へと昇華されるのである<sup>72</sup>。樽井が『大東合邦論』立論時に、これらの議論を踏まえているかどうかは不明である。しかし、樽井の主張が「弱者進化型ダーウィニズム」の原理を包摂する形で提起されている以上、これらの『人権新説』批判言説と有賀「社会学」は、樽井のような「興亜」言説を原理的に否定することは不可能なばかりか、むしろその駆動原理を備給してしまうのである。

そして、この有賀「社会学」——『人権新説』批判言説——『大東合邦論』という、「弱者進化型ダーウィニズム」の一連の系譜の最大の問題点は、弱者の進化、あるいは、強者への対抗手段としての、弱者同士による共同体形成を謳いながらも、弱者への抑圧を可能にしてしまうという、一種の逆説的な事態を招来することにこそある。そうした事態は、樽井の次のような認識が実際の権力関係に敷衍されるときに、最も顕在化する。

今朝鮮清に敵するの心なしといえども、懦弱頑鈍以てその俗を成す。一朝白人の扱る所となれば、則ち清国の利害果して如何ぞや。清国の長計は、その恃むに足らざるものをして恃むにたるものたらしむるに在り。朝鮮の恃むに足らざる所以はその国の貧弱による。彼今日本と合してその力を養えば、則ちその気宇自然に闊達す。これ恃むに足らざるものを変じて恃むに足るものとなすなり。大東合邦の事、清国に益ありて害なきかくの如し。<sup>73</sup>

ここでは樽井の、朝鮮・中国への蔑視感と、それを裏づける文明化した日本という優越意識がみてとれよう。こうした「脱亜」言説とも共通した蔑視／優越意識が前景化するとき、それは「対等合邦」を称しつつも、日本の指導的役割の正当性の論拠を構成する。ここに

において、「弱者生存」を名目にした対外膨張を可能にする、「興亜」論の典型的なアポリアが現出するのである。社会ダーウィニズムの二潮流は、いずれにせよ、「外圧」を発生させると同時に、対外膨張志向を促すイデオロギー装置として機能するのである。

## 結語 —アポリアからのエクソダス—

さて、最後に本稿の分析を通じて得られた結果を整理し、我々の知的探究を、一旦終着点へと導くとしてよう。

「弱肉強食の世界」という対外認識に基づいて、日本が生存を模索する方法として、知識人は社会ダーウィニズムを受容し、いわば「日本版」社会ダーウィニズムの形成を志向した。加藤弘之はまず『日本之開化』と題する草稿において、社会ダーウィニズムの選択的受容からその形成を志向したが、自由民権運動批判Ⅱ国家主義的立場から立論した『人權新説』と、その後の人種改造論争において、「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」へと極端に傾斜することで日本の不可能性を強調し、弱者生存の不可能性を顕在化させた。また、加藤の社会ダーウィニズムの論理構造は、そもそも国民Ⅱ国家形成すらも困難にするものであり、「日本版」社会ダーウィニズムとしては機能不全なものであった。

その一方で、加藤と同様の問題関心を共有した有賀長雄が構想した「社会学」は、「優勝劣敗・自然陶太」原則に基づきながらも、そこに、強者となって生存するための因子として、共同体形成という契機を挿入することによって、弱者が強者となり、生存競争に適応していくという主張を可能にした。さらに、有賀「社会学」は、加藤の「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」が困難とした国民Ⅱ国家形成を、族制進化の法則によって弁証し、国民Ⅱ国家の有機的な結合と内安外競を可能にしようとするイデオロギー的強度のある議論を展開した。この地点において、日本における社会ダーウィニズムは、「優勝劣敗・自然陶太」という一つの基本原則を共有しつつも、そこから二つの支流が生みだされることとなった。一つは「強者必勝・弱者必滅型ダーウィニズム」であり、もう一方は「日本版」社会ダーウィニズム、すなわち、「弱者進化的型ダーウィニズム」である。これら二つの社会ダーウィニズムは、「外圧」を発生させつつ、それぞれ独自の仕方で「脱亜／興亜」言説へと円滑に接続し、相補的なデュアルコア・イデオロギーとして、対外膨張を正当化するのである。

さて本稿では、社会ダーウィニズムと対外認識をめぐる諸言説を空間的に再配置し、以

後、帝国主義という、漆黒の闇へと滑落していく明治日本の基礎的な認識地図を描写した。それは同時に、デュアルコア・イデオロギーとしての社会ダーウィニズムと文明史観的な対外認識とが、つねに「外圧」の存在を理論的な前提とし、イデオロギー的強度を獲得してきた過程の見取り図でもある。この見取り図を前にしたとき、我々は、対外観をめぐる理解をひとまず次のように定式化できよう。すなわち、社会ダーウィニズムと対外認識という、相互に強固に結びついたデュアルコア・イデオロギーこそが、「外圧」を発生させるイデオロギー装置に他ならず、それによって、対外膨張が正当化された、と。

このイデオロギー装置は、帝国主義の舵取りの役割を果たしただけに留まらず、「外圧」を指定することによって、近代国家・日本という共同体空間を構成するための認識論的枠組みを提供するのである。すなわち、社会ダーウィニズムと対外認識とは、カール・シュミット一流の表現を借りれば<sup>74</sup>、「敵／友」の区別を発生させるイデオロギー装置であり、「侵略者Ⅱ敵」としての西洋と、「侵略先Ⅱ敵」としてのアジアという二層化された敵と、その間に位置する「共同体空間Ⅱ友」としての日本を、一挙に現出せしめる壮大なイデオロギー装置に他ならないのである<sup>75</sup>。

ここまで本稿が明らかにしたことは、社会ダーウィニズムと対外認識との結合によって構成される言説空間に充満した数々のアポリアである。しかし我々は、社会ダーウィニズムの核である「進化」という概念そのものすらも、そうしたアポリアと同一視し、もはや使用に耐えない過去の遺物として、葬り去らなければならないのであろうか。むしろ、社会ダーウィニズムによってもたらされたアポリアは、同じく社会ダーウィニズムによって脱出経路を見出すことは可能ではないだろうか。

その意味において、最後に植木枝盛の思想に注目して、我々の知的探究に一旦終止符を打つこととしよう。植木は『板垣政法論』において、国際社会の現状を次のように述べる。

凡ソ大且強ナル者ハ猥リニ小且弱ナル者ヲ圧倒シテ其ノ肉ヲ食トスル者アリ【中略】  
若シ其形状ヲ一見スレバ之レヲ宇内ノ戦鬪ト云フ可キ歟、寧ロ無法無政ノ乱世ト称セザルヲ得ザル也<sup>76</sup>。

このように植木は、国際社会が弱肉強食の世界であることを前提としながらも、その対抗策としての地域連合構想については、こう主張する。

曰ク今日ニ在テ世界ノ如斯暴乱ヲ極メ宇内ノ地平ヲ得ザルト云フ者ハ其主ヲ関係スル所歐洲ノ亜細亞ヲ圧倒スルニアレバ、此勢ヲ防制スルノ道ハ亜細亞連合ノ策ヲ立ツルニ在トスル乎。曰ク未可ナリ。夫レ亜細亞ノ聯合ハ其事全ク利ナシト云フニアラズシ



テ或ハ之レヲ一個ノ有益事業ト云フベク、今日ニ於テ之ヲ行フモ亦猶ホ多少ノ便利ヲ見ルコトナキニ非ザルベシト雖モ、畢竟是亜細亜ニ在テ歐洲ノ横暴ヲ防禦スル一時ノ姑息的事タルニ過ギズシテ、其事狭小ニ属シ其時モ亦頗ル遅晩ヲ免カル、コト能ハザル也。<sup>77</sup>

ここで植木は、「興亜」言説が主張するような、アジア連帯構想を退けている。その理由の一つには「遅晩」ということが挙げられており、アジアの諸勢力を結集させたとしても西洋に対抗するには限界があるという、冷徹な現状認識が垣間みえる。しかし、一方で地域連合構想を「狭小」と批判する植木は、いかなる方策を提起するのであろうか。

それは、これまでみてきたような同時代のイデオログ達が、弱肉強食世界としての国際社会という、既存の認識枠組み内部に留まっていたのに対して、一線を画するものであった。

宇内ノ暴乱ヲ救シ世界ノ治平ヲ致スベキモノハ万国共議政府ヲ設ケ宇内無上憲法ヲ立ツルニ在リ。是実ニ公明正大最モ順応ノ事ニシテ、無理タラズ無効タラズ不備タラズ危殆ナラズ狭小ナラズ、能ク今日ノ如キ宇内ノ暴乱ヲ救正シ以テ世界ノ治平ヲ致スニ足ル可ク、更ニ最モ自由幸福ヲ享受スルニ益アリテ善美ノ結果ヲ得可シ。<sup>78</sup>

こうして植木は「万国共議政府」という、コスモポリタンの発想を導入することにより、弱肉強食世界を克服する脱出経路<sup>エスケップ</sup>を志向する。植木のこの志向は、ひいては「天下ノ各国克ク其国ヲ小分シ其国ヲ改廢」し、「国家ノ兵備ヲ減少若クハ廢止スル」ことまでもを射程に入れており、「最モ自由幸福ヲ享受スルニ益アリ」とする理由は、こうした暴力装置としての国家主権の相対化までもを可能にする点にある。自由民権論者として、国権の伸張と常に対峙する植木ならではの発想だが、こうした志向は、国権と民権という国内問題のみに留まらず、国際社会における「敵／友関係」の相対化という、壮大な射程をも有しているのである。

このように、明治一〇年代の言説空間のアポリアは、そこに内在する植木の思想によって超克される。植木がその可能性を次のように述べるとき、そのことはより一層明らかとなる。

天地ノ万物ハ恒ニ変遷スルモノニシテ社会ノ形勢モ亦常ニ転化セズト云フコトナケレバ彼ノ万国共議ノ事、世界連帯ノ事ノ如キノ今日ノ勢ニ於テ行ハレ難キコトアルト云フハ却テ今少シク進歩スレバ能ク行ハル、ト云フノ意ヲ含メリ<sup>79</sup>。

社会ダーウィニズムに、「進化」という概念に一縷の望みがあるとすれば、この僅かなが

らの脱出経路に他ならないのである。

さて本稿に与えられた紙幅も、いよいよ尽き果てた。二つの社会ダーウイニズムという、本稿で用いた分析枠組みについては、以降の変容を踏まえながら、その有効射程距離を論じる必要があるだろう。その意味において本稿の成果は、我々の以後の「進化」を可能にするための、基礎的な作業空間の創設に留まらざるをえない。次なるステージは、別稿にその場所を求めるとしよう。

〈凡例〉本稿に引用した史料は、旧漢字を適宜、新漢字に改め、原文が漢文であるものは、読み下し文に改めた。また、史料中の傍点・下線などは、原則として原文中にあるものをそのまま引用したものである。筆者による断りがある場合は【】を用いて表記している。

<sup>1</sup> 渡辺正雄「明治期における進化論の受容」、渡辺正雄編『ダーウインと進化論』、共立出版、一九八四年、一九三―八頁。

<sup>2</sup> 山路愛山「現代日本教会史論」、一九〇六年、山路平四郎校注『基督教評論・日本人民史』、岩波書店、一九六六年、七五頁。

<sup>3</sup> 武田時昌「加藤弘之の進化学事始」（阪上孝編『変異するダーウイニズム』、京都大学学術出版会、二〇〇三年に所収）は、加藤弘之の社会ダーウイニズムの受容と形成過程について一次史料に基づいて詳細に分析しているが、その成果は受容経路のみに留まっている。

<sup>4</sup> 鶴浦裕「近代日本における社会ダーウイニズムの受容と展開」、柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編『講座進化② 進化思想と社会』、東京大学出版会、一九九一年。

<sup>5</sup> このタイプの先行研究については、枚挙に暇がないといったほどの豊富な蓄積がある。特定の出版言説やグループについては、研究したものは、山田昭次「対朝鮮政策と条約改正問題」（『岩波講座日本歴史・一五・近代二』、岩波書店、一九七六年に所収）、同「自由民権期における興亜論と脱亜論 ―アジア主義の形成をめぐる―」（『朝鮮史研究会論文集』六集、一九六九年に所収）、浜口裕子「明治初期の対アジア観の一考察 ―郵便報知新聞』に見る「非征韓論」と「脱亜論」の間―」（『文化女子大学紀要・人文科学研究』第六集、一九九八年に所収）などが挙げられる。特定個人の言説について之研究は、坂野潤治『明治・思想の実像』、創文社、一九七七年、初瀬龍平「『脱亜論』再考」（『平野健一郎編』『国際関係論のフロンティア2 近代日本とアジア』、東京大学出版会、一九八四年に所収）、伊東昭雄「『大東合邦論』について」（『横浜市立大学論叢』第24巻人文科学系列 第2・3号、1973年に所収）などがある。

<sup>6</sup> 代表的なものに、芝原拓自「対外観とナショナリズム」（芝原拓自・猪飼隆明・池田正博編『対外観 日本近代思想大系12』、岩波書店、一九八八年に所収）、伊藤之雄「日清戦前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」（古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』、緑陰書房、一九九四年に所収）がある。

<sup>7</sup> 小林啓治「帝国体制と主権国家」、歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座8 近代の成立』、二〇〇五年、一〇五―六頁。

<sup>8</sup> 一八八五年三月一六日『時事新報』社説、慶應義塾『福沢諭吉全集』第一〇巻、岩波書店、一九六〇年。

<sup>9</sup> 初版一八九三年、『覆刻大東合邦論』、長陵書林、一九七五年。

10 平石直昭「近代日本の「アジア主義」——明治期の諸理念を中心に」、溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える5 近代化像』、東京大学出版会、一九九四年、二七二頁。

11 『人権新説』をめぐる天賦人權論争の論争過程の整理は、松沢弘陽「天賦人權論争覚え書」、家永三郎教授東京大学退官記念論集刊行委員会編（『近代日本の国家と思想』、三省堂、一九七九年所収）を参照のこと。

12 松本三之介『近代日本の政治と人間』、創文社、一九六六年を参照のこと。

13 「解題」大久保利兼・田畑忍監修、上田勝美・福島寛隆・吉田曠二編『加藤弘之文書』第一巻、同朋社出版、一九九〇年、五六八―九頁。

14 『日本の開化』が準備されたのは、一八七九年六月から一八八一年一〇月と推定されている。前掲「解題」、『加藤弘之文書』第一巻、五六九頁を参照のこと。武田前掲論文は『疑堂備志』と『日本の開化』を一对のものとして分析しているが、主な分析の焦点は思想の受容経路のみに当てられおり、加藤の社会ダーウィニズムの思想的意義を見落とし

ている。

15 前掲『加藤弘之文書』第一巻、一六一頁。

16 前掲『加藤弘之文書』第一巻、一六六頁。

17 前掲『加藤弘之文書』第一巻、一七一頁。

18 前掲『加藤弘之文書』第一巻、三〇九頁。

19 前掲『加藤弘之文書』第一巻、一七一頁。

20 前者については、

〔頭註〕

〔◎後ノ同符〕ヘンネ、アムレーン氏ノ説ニテハ諸人種膚色等ノ差異ハ土地ノ差異ヨリ生シタリト云フ其説同氏開化史ノ第一巻第十丁ニ詳ナリ（割注ヘルワールド氏ノ説ニ左祖ス）

〔前掲『加藤弘之文書』第一巻、一八六頁〕

後者については、

〔頭註・先〕

○「人種」人種ハ決シテ氣候土地等ノ差異ヨリ分レタルニ非サル云々バジョウ氏ウールスブルングデルナチオーネン【バジョット『Physics and Politics』の独訳本・

筆者註】第九十七丁以下ニ詳ナリ【前掲『加藤弘之文書』第一巻、一七六頁】

などが例として挙げられる。

21 前掲『加藤弘之文書』第一巻、一九〇頁

22 加藤は次のようにヘルワールドの議論を評価しつつも、失望の意を表している。

○人類ノ開化ニ大關係ヲナス者ニ内外ノ別アリ第一外部ノ者ハ地勢氣象等其他ノモ

ノ第二内部ノ者ハ即人類自身ニシテ其形体ト心神ナリ云々次ニ外部ノ關係ニ種々

ノ有様アリ云々内部ニ至リテモ種々アリテ諸人種皆相違ナルナリ之ヲ *ethnische*

*Moment*ト云フ然ルニ史家大抵之ニ着眼スルヲ怠ル而シテ之ヲ怠ルニ二種アリ一ハ

之ニ着眼ススヘキノ理ヲ知ラサル者ニハ之ヲ知ルモ緊要ノコトト思ハサル者是

ナリミル氏及ヒバツクル氏等ノ如シ然レトモ右内外ノ事ヲ十分ニ知ラサレハ真ノ

開化史ヲ編スルコトハ能ハサルナリ云々ヘルワルド氏開化史上卷第五十三四五六

丁ニ甚タ詳ナリ(欄外)「然ルニ其次キヲ読ムニ大ニ面白キ説ニアラス殆ト失望」【前掲

『加藤弘之文書』第一卷、一九四頁】

ヘンネ・アムラインの先天的・遺伝的要因による人種形成理論が、「ヘルワルド氏ノ説ニ左祖ス」と評されていることからみても(註20)、加藤にとつてヘルワルド理論は、人種間の肉体的差異と精神的差異を単線的に文明差に結びつけるものとして、退けなければならぬと見られたのであろう。

23 前掲『加藤弘之文書』第一卷、二〇九頁。

24 前掲『加藤弘之文書』第一卷、二一八頁。

25 前掲『加藤弘之文書』第一卷、二五三頁。

26 前掲『加藤弘之文書』第一卷、二七三頁。

27 前掲『加藤弘之文書』第一卷、二九六―八頁。

28 前掲『加藤弘之文書』第一卷、三〇一頁。

29 前掲『加藤弘之文書』第一卷、三〇一―三頁。

30 前掲『加藤弘之文書』第一卷、三二一―五頁。

31 前掲『加藤弘之文書』第一卷、三〇九頁。

32 『文明論之概略』、一八七五年、前掲『福沢諭吉全集』第四卷、一八頁。

33 両者が軌を一つにしているのは、西洋文明への姿勢のみにとどまらない。歴史段階の把握についても、両者は日本を「半開」といって位置づけている。前掲『福沢諭吉全集』第四卷、一六頁と、前掲『加藤弘之文書』第一卷、三二五頁とを参照のこと。

34 前掲『加藤弘之文書』第一卷、三一七頁。

35 一八六九年二月二八日「具視外交会計蝦夷地開拓ノ三件ヲ朝議ニ附スル事」、多田好問編『岩倉公実記』中巻、原書房、一九六八年、六九九頁。

36 一八六八年一月一日「野村素介宛書簡」、木戸公伝記編纂所編『木戸孝允文書』第三卷、日本史籍協会、一九三〇年、一八八頁。

37 加藤弘之『人權新説』、一八八二年、明治文化研究会編『明治文化全集第二卷 自由民権編』、日本評論新社、一九二七年、三六二頁。

38 前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、三七五―六頁。

39 前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、三六九頁。

40 前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、三八〇頁。

41 加藤弘之「人為淘汰ニヨリテ人才ヲ得ルノ術ヲ論ス」、『東洋学芸雑誌』第一号、一八八一年一〇月、五頁。

42 前掲「人為淘汰ニヨリテ人才ヲ得ルノ術ヲ論ス」、『東洋学芸雑誌』第二号、一八八一年一〇月、一七―九頁。

43 高橋義雄『日本人種改造論』、一八八四年、明治文化資料叢書刊行会編『明治文化資料叢書』第六卷社会問題編、一九六一年、二三―四頁。

44 前掲『日本人種改造論』、明治文化資料叢書刊行会編『明治文化資料叢書』第六卷社会問題編、四五―六頁。

45 加藤弘之「人種改良ノ弁」、『東洋学芸雑誌』第三卷第五三―四号、明治一九年二月、三八五―四二三頁。

46 前掲「人種改良ノ弁」、『東洋学芸雑誌』第三卷第五五号、明治一九年四月、四七九頁。

47 こうした傾向は、「内地雑居論争」時の加藤の議論にも通底している。加藤は外国人の内地進出に伴って、日本人との間で発生が予想される競争状態について、西洋人の優位性に基づいて「此競争は決して容易なることにはあらざるなり」と述べている。加藤弘之『雑居尚早』、哲学書院、一八九三年、二一九頁。

48 国内政治的コンテクストを「転向」の外在的契機としつつも、加藤の思想に内在する要因から、「転向」以前・以後の加藤の思想的・一貫性を指摘した松本前掲書は、その意味では正しい。蛇足を承知の上で、あえて加藤の「転向」の外在的契機について推測をしておくならば、時代的背景としての明治一四年の政変と、自由民権運動の高揚ということがポイントとして挙げられるかもしれない。明治一四年の政変は、井上毅による福沢諭吉の弾圧を帰結したことからも、言論人への直接的な影響を及ぼす可能性は充分にある。加藤が『議堂備志』を記しながらも、『日本之開化』でひとまず筆を置くにあたって生じたおおよそ一年の時差（前者は一八七七年一月三〇日から一八八二年一月、後者は一八七九年六月から一八八一年一〇月）、そしてそれが丁度、明治一四年の政変が沈静化した後の一年であること、そしてなによりも、『日本之開化』が未完・未公刊に終わっていることは、こうした推測を進めるにあたって、極めて示唆に富んでいる。明治一四年の政変については渡辺俊一「明治一四年政変再考―井上毅と福沢諭吉」、『年報・近代日本研究』一八号、一九九六年を、福沢弾圧の事例としては、寺崎修「徴兵令と慶應義塾」、笠原英彦・玉井清編『日本政治の構造と展開』、慶應義塾出版会、一九九八年を参照のこと。

49 鶴浦前掲論文、一二八―三〇頁。

50 本節で提示した分析枠組みである「強者必勝・弱者必滅型」／「弱者進化型」という、ダーウイニズムの二類型は、鶴浦前掲論文が提示した「個人主義的」／「集団主義的」ダーウイニズムという二類型に、その着想を得ている。鶴浦前掲論文は、国民統合理論としての社会ダーウイニズムを分析しているため、「個人」／「集団」という分類を行っているが、こと国際社会というコンテクストから社会ダーウイニズムを分析した場合、本稿で提示した分類でなければ、精確な実態把握は困難である。

51 鶴浦前掲論文、一四七―九頁。

52 有賀長雄『社会進化論』、東洋館書店、一八八三年、凡例二頁を参照のこと。

53 この時代区分は、それぞれ以下の対応関係にある。「君主専制の世」⇨平安時代、「戦国擾乱の世」⇨鎌倉時代⇨戦国時代、「教権一統の世」⇨江戸時代、「革命擾乱の世」⇨幕末期、「法律一統の世」⇨明治維新時代、「議論擾乱の世」⇨自由民権運動高揚期。その詳細については前掲『社会進化論』第三部「国家盛衰編」を参照のこと。

54 前掲『社会進化論』、四一三―三五頁。

55 前掲『社会進化論』、二六九―七〇頁。

56 前掲『社会進化論』、四五五―六九頁。

57 前掲『社会進化論』、二三九―四四頁。

58 前掲『社会進化論』、一〇六―一五頁。

59 前掲『社会進化論』、一一五―二三四頁。ちなみに、有賀は宗教が日本において体制の強化をもたらしたということについては、ほとんど否定的であり、考察対象から除外している。その詳細については有賀長雄『宗教進化論』、東洋館書店、一八八三年、四二七頁を参照のこと。

60 有賀長雄『族制進化論』、東洋館書店、一八八四年、二四二―五六頁。

61 前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、三七〇―一八〇頁。

62 前掲『福沢諭吉全集』第一〇巻、二三九―四〇頁。

63 馬場辰猪『天賦人權論』、一八八三年、前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、四五〇―一頁。

64 一八八二年七月一二日『自由新聞』第一一号掲載、『馬場辰猪全集』、岩波書店、一

- 九八八年、二四頁。
- <sup>65</sup> 一八八五年四月七―九・一―一五〇日『朝野新聞』第三四一八―二〇号・三四二二  
号・三四二五号掲載、前掲『馬場辰猪全集』、三八四―九頁。
- <sup>66</sup> 前掲『大東合邦論』、九四頁。
- <sup>67</sup> 前掲『大東合邦論』、一一―二頁
- <sup>68</sup> 平石前掲論文を参照のこと。
- <sup>69</sup> 松沢前掲論文、一七四―五を参照のこと。
- <sup>70</sup> 「人権新説ヲ評ス」、一八八二年一月一〇―二・一四―六・二一―二・二六日『東  
京横浜毎日新聞』掲載、『人権新説駁論集』、前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、  
四一三―二三頁。
- <sup>71</sup> 前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、四一三―四頁。
- <sup>72</sup> 矢野文雄『人権新説駁論』、一八八二年、前掲『明治文化全集第二卷 自由民権編』、  
三九六―七頁。
- <sup>73</sup> 前掲『大東合邦論』、一三七頁。
- <sup>74</sup> カール・シュミット『政治的なるもの概念』、田中浩・原田武雄訳、未来社、一九  
七〇年を参照のこと。
- <sup>75</sup> とくに芝原前掲論文は、対外認識とナショナリズムとを同時並行的に論じながらも、  
こうした連関性と位置づけを得るには至っていない。
- <sup>76</sup> 植木枝盛『板垣政法論』、一八八一年、『植木枝盛集』第一卷、岩波書店、一九九  
〇年、八六―七頁。
- <sup>77</sup> 前掲『植木枝盛集』第一卷、九〇―一頁。
- <sup>78</sup> 前掲『植木枝盛集』第一卷、九二頁。
- <sup>79</sup> 「無上政法論ヲ補周ス」、一八八二年三月一―三日『土陽新聞』掲載、前掲『植木  
枝盛集』第一卷、一二―一頁。